

2024年更新版

# 特定非営利活動法人1to1 理念と実践について

特定非営利活動法人1to1

理事長 武井 剛

080-9893-5010

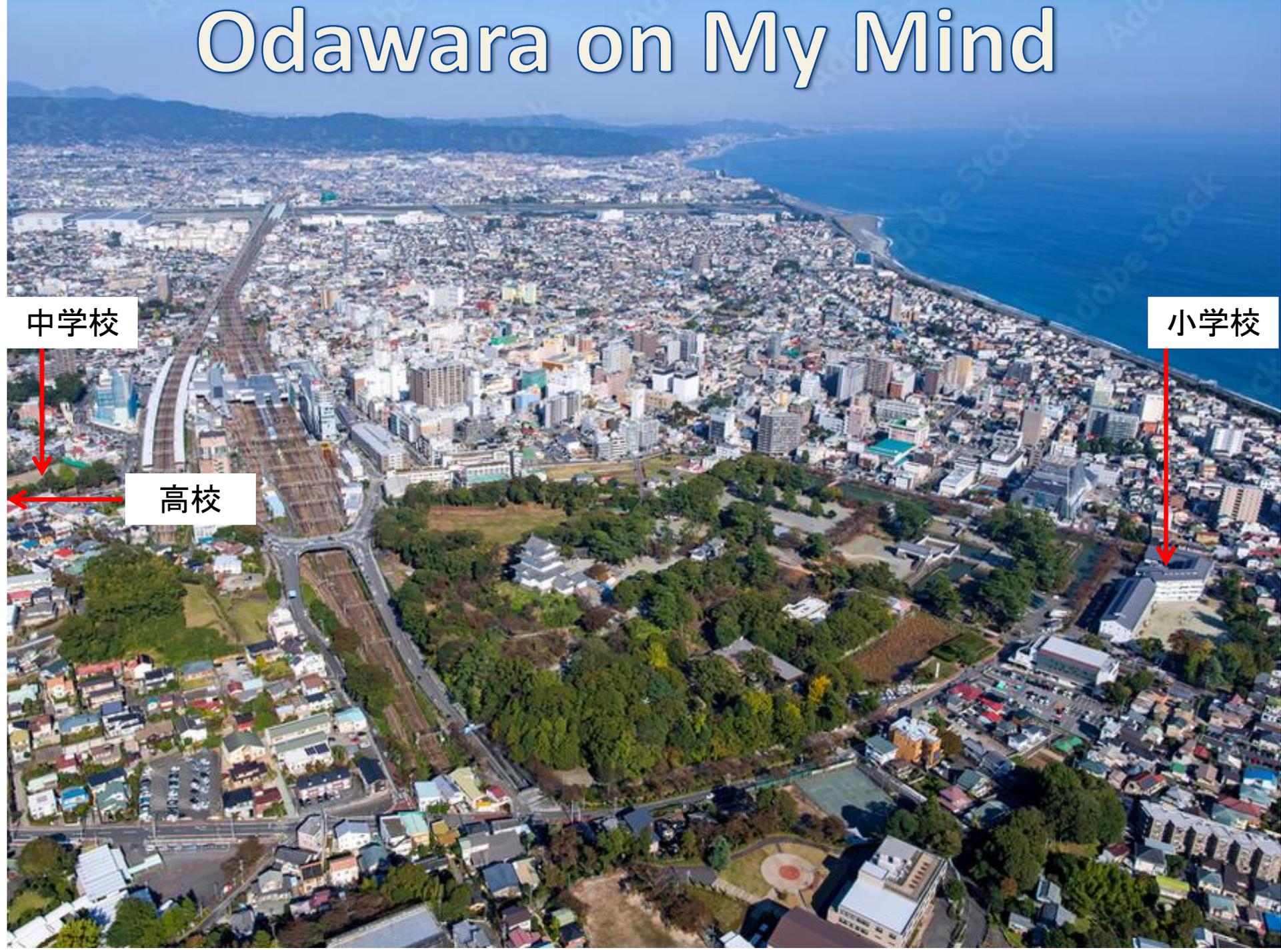
<https://npo1to1.wixsite.com/website>

「個」が「孤」にならない社会を

## <自己紹介 ～僕が「私」になるまで>

- 1976年 8月、小田原生まれ 子供の頃に漠然と信じていたアカルイミライ
- 90年代 マネー経済・グローバル化(均一化)の波に飲まれ国や地方が衰退  
→価値基準(モノサシ)が一つだけになることで、競争と格差が激化  
「生きづらさ」の正体 **そのモノサシは本当に正しいのか??**
- 00年代 元・米国人社長のIT企業で勤務 ～不均衡な経済システムとテロ事件  
→一人で自分の「生きかた」を問う 不毛なゲームからは降りる  
第三世界(キューバなど)への関心 **「自分」を取り戻す!**
- 2005年 28歳の夏、無認可作業所で障がいのある人たちやご家族と「出会う」  
→「運命」を受け入れる **(仲間たちと)ワイルドサイドを歩け**
- 2009年 結婚、法人1to1として事業活動スタート  
→「背負う」人生を歩む **世界の行く末を(仲間たちと)見届けたい**

# Odawara on My Mind



中学校



高校

小学校



# 障がいのある方々と「出会い」人生を取り戻した30代

生きることは、はたらく(はたらきかける、かかわる)こと  
commitment...他者や世界への貢献を通じて、自分を生(活)かす

世界がひっくりかえる大発見！～「弱さ」は連帯の絆、「違い」は個性、「多様性」は豊かさ  
目の前の人を輝かせる、いま・ここを「より良い」状態に変える (social action)  
そのモチベーションが自分の「内なるエネルギー」を引き出し、生まれ変わらせてくれる

- 他者や社会、世界と「出会い・繋がる」 ⇒ 驚き・喜び
- 自分が何をなしうる人間なのかを「知る」 ⇒ 誇り・自己信頼
- 人生は生きるに値することを「実感する」 ⇒ 感動・自己肯定



# NPO法人 1 to 1

地域における日々の暮らしの中での  
1対1の関係を大切にする

## 経営理念

私たちは、常に『個』の想いに寄り添い、人と人との《1 to 1》のかかわりを大切に育みます

## 行動指針

### 一. 【基本姿勢・かかわり】

私たち一人一人が、同じ時代を、同じ地域社会の中で共に生きる仲間として、“いま・ここ”にいる一人一人と向き合い、その人固有の「役割」をつくり、《輝き》に変えます。

### 一. 【組織風土・職場環境】

私たち一人一人が、「いきること」「はたらく」ことが本体持っている純粋な《喜び》を体現できるよう、常に自分自身を変化させ、“いま・ここ”を、風通しの良い、民主的な、人が共に育ち合う組織・職場に変えてゆきます。

### 一. 【社会参加・地域創造】

私たち一人一人が、時代や社会の変化を常に敏感に感じながら、“いま・ここ”にいる仲間たちと社会との橋渡し役となり、《多様性》と《生命力》そして《やさしさ》に満ちた「共生社会」の創造と発展に寄与します。

# 「理念」に込めた想い

★『個』の想いに寄り添う・・・「その人」を知り、深く・感じること

＜想い＞は目に見えない ⇒手がかりとなるのは

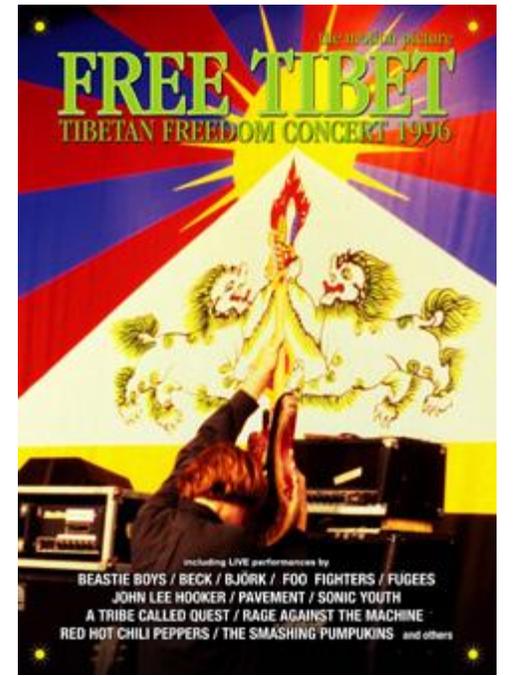
- ・その人の過去(歴史・環境)
- ・その人の現在(状態・状況)
- ・その人の未来(夢・希望)

そのためにも、センサーとしての己の『個』を磨く＝経験や知見を深め、感受性や想像力を高める！

★<<1to1>>のかかわりを大切に育む・・・「その人」と時間をかけて、丁寧に・付き合うこと

- ・古い友人のように／長い線路のように
- ・河よりも長く、ゆるやかに(焦らない)
- ・共に時を超え、年を重ねる(一緒に歩む)

そのように人々がはたらく環境やかかわり合いの輪、地域・社会を、自分たちの手づくりだす！



Do all the people free!  
私たちは、「歴史」の一部

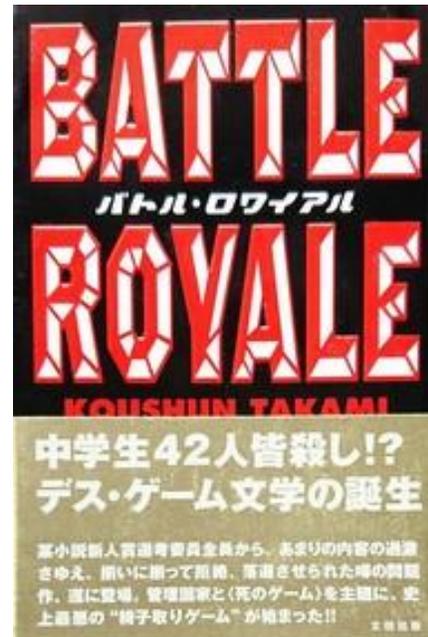
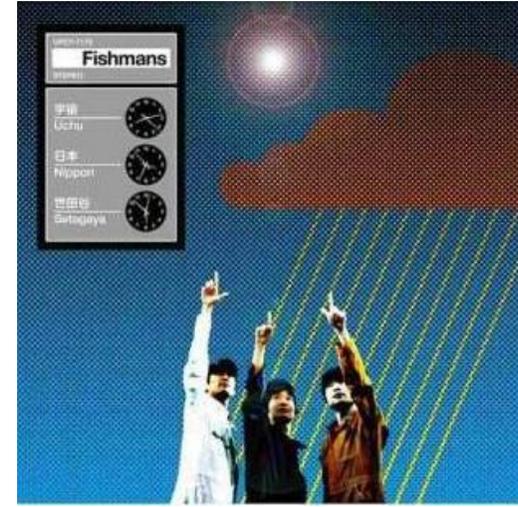


## 若い頃に考えていたこと①:

# 個の時代 ～late 90's「世紀末」の閉塞の中で・・・

- 時代の分水嶺、1995年。3月に高校を卒業し、八王子の4年生公立大学へ。
- 阪神・淡路大震災(1月)、地下鉄サリン事件(3月)、大和銀行巨額損失事件(7月)、援助交際ブーム(8月頃～)、在沖米兵小6女児拉致・強姦事件(9月)、**高速増殖炉「もんじゅ」ナトリウム漏洩・燃焼事故(12月 →「核燃料サイクル」の挫折)**。「戦後50年」とは、こういう年。当時まだかすかに残っていた「バブルの残り香」は、その後、急速に失われていく。
- 一方、日本社会の中で「個」を貫いたNOMOは海を渡り、全米にトルネード旋風を巻き起こす。逆に、米国からはWindows95が上陸。**剥き出しの「個」が世界と直に対峙する時代の幕開け。**
- 90年代後半、米国ではアマゾンが創業。日本では大規模店舗法も廃止され、郊外には大型のロードサイド店が立ち並び、地元の個人商店から成る商店街はシャッターを下し始める。
- **1997年、アジア通貨危機。グローバル化により国境を越えた金融取引(マネー移動)が進む。戦後築き上げられた日本社会は機能不全を起こし、大人たちは自信喪失。子供たちは混乱。**

# 当時の私的空気感



# 若い頃に考えていたこと②: 焦燥と逡巡 ～「ゼロ年代」の荒野を往く



- 大学を1年留年。「就職氷河期」を潜り抜け、2000年4月に「なんちゃってSE」として社会に。幕張の「不夜城」、WBGオフィスの27階で勤務。(習志野市に転居 →千葉県民に！)
- 世紀末の重い空気はどこへやら...「祭り(バブル)」の余韻醒めやらぬIT界隈の大人たちは、現実に背を向けて盛り上がっていた。(モー娘。クラブカルチャーetc.)
- しかし、新聞に目を向ければ、DV、児童虐待、少年犯罪、不登校、引きこもり、非正規雇用の若者たち、勝ち組負け組、自己責任論など...現在へと至る問題のオンパレード。
- 冷戦終結から10年。「社会主義(革命)」は敗れ、世界はグローバリゼーションの波に飲まれた。外部資本の浸食により地域共同体の<空洞化>が進み、貧困や不幸は「個人の問題」に...
- そして2001年、「9.11」の衝撃。(現代のパール・ハーバー)  
「先進国って何?」「まともな暮らしってどういうもの?」「オマエはどうする?」  
「世界を知らなければ! 自分を取り戻さねば!!!」

# 社会主義(革命)の国・キューバでワシも考えた (2002.12～2003.1)



## 若い頃に考えていたこと③:

### 転機 ～希望としての「地域福祉」

- 30歳を前に、自分なりの**アンサー(着地点)**を探し続ける。
- グローバリゼーションにより**地域共同体の解体・空洞化が進む世界で、その流れに「抗いながら生き続ける」ための根拠を！**
- 2004年12月、アパートに投函された1枚のビラ(職員募集・時給800円)。  
→2005年7月、20代最後の夏に**「ドロップ・アウト！」**。
- 船橋市内の無認可施設(心身障害者小規模福祉作業所)。  
**「広い世界のかたすみ」**で出会った暗い目をした不器用な**「仲間たち」**。
- 重度の知的障がいの人たちや長引く不況で職場をリストラされた同年代の若者、精神科病院に通いながら社会との繋がりを求めていた人たち。  
**よくよく考えたら、自分だって同じ。「居場所」なんて、いない！**  
**→我らが歩けば、そこに「道」ができる。(はず！)**

どこで・どんな人たちと・どんな風に生きるか？



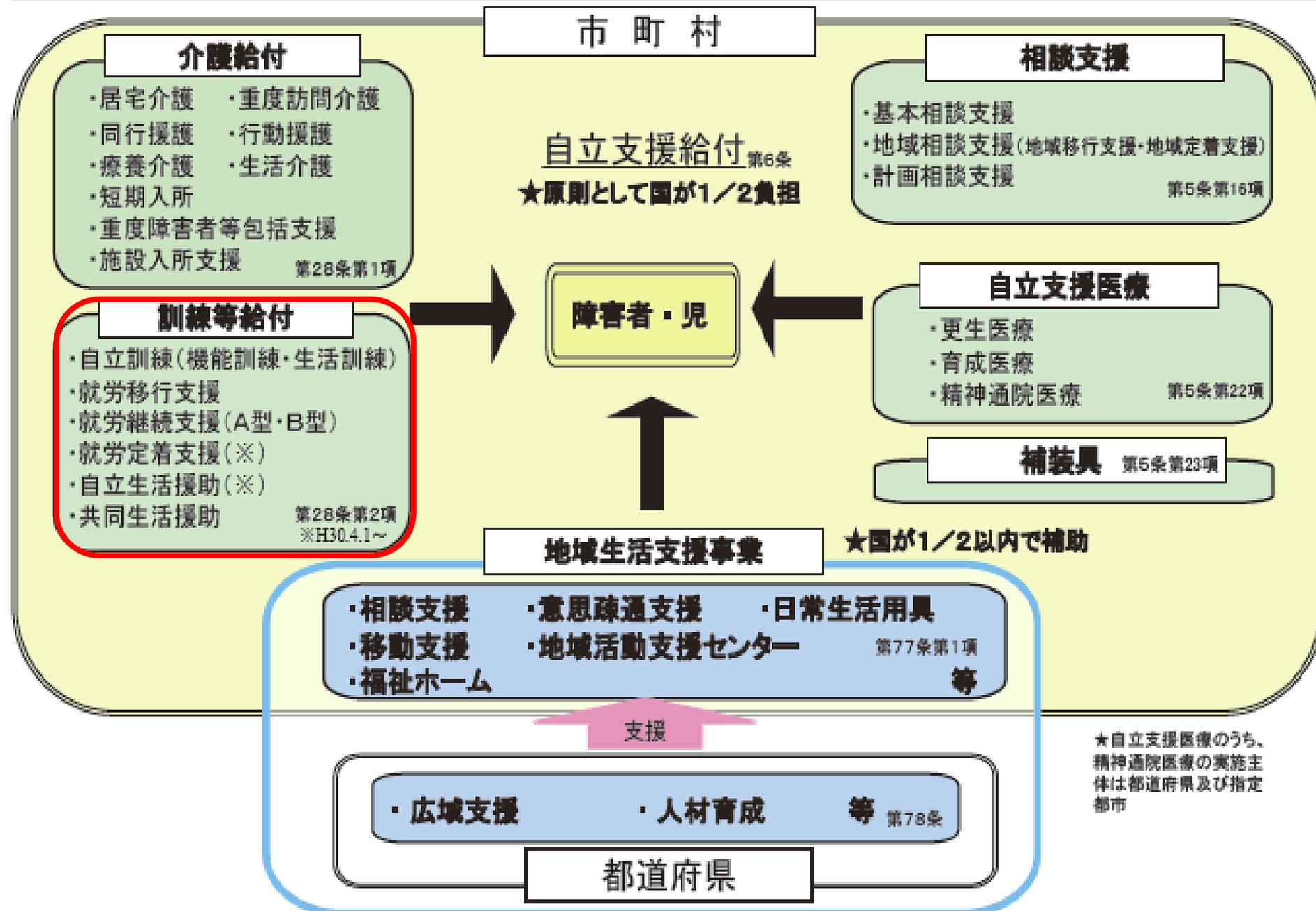
# 黄昏ゆく時代の中で①:

## 変わりゆく福祉 ～「障害者自立支援法」の衝撃

- 財政難を背景に、契約制度・受益者負担の導入。(福祉のサービス化)
- 障害者は、「保護」から「自立」へ向けた支援の対象へ。(就労支援の強化)
- 障がいごと(身体・知的・精神)に別々だった制度が一本化。後に難病者も。
- そして、規制緩和による事業者の参入促進。「作業所」も選択を迫られる...

年次	法律の制定	障がい者の処遇	備考
1949	身体障害者福祉法	措置制度の時代	その結果受ける福祉の費用は行政が給付
1951	社会福祉法	※利用者の処遇は行政が措置	精神障害は医療(保健所)の管轄
1960	精神薄弱者福祉法	※障害種別ごとに制度が別々	
1970	障害者基本法	で縦割りでサービスが提供	
2003	社会福祉事業法 支援費制度法	契約制度の時代 ※利用者本人(or保護者等)が利用するサービスを選択	利用者本人の収入に応じてサービス利用料のうち1割を負担(応能負担)
2006	障害者自立支援法	※自立支援法より精神障害者も制度の対象に含まれるように	利用したサービス料の1割を利用者(or保護者)が負担(応益負担) →2012年より所得に応じた応能負担に

# 障害者総合支援法の給付・事業



## 黄昏ゆく時代の中で②:

# エクソダス2008 ～再び「地域」へ！

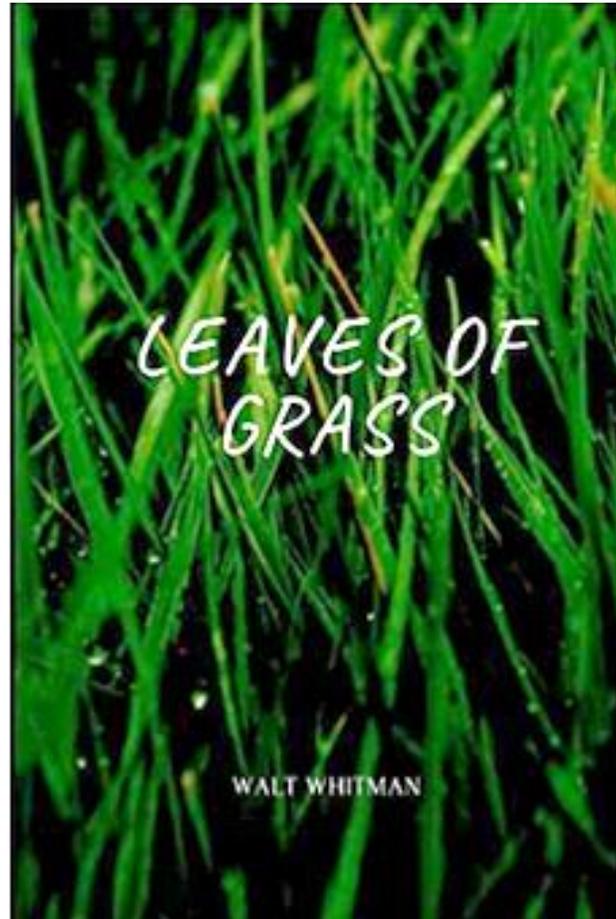
- 無認可であることの限界。10名の利用者に対して年間700万円の補助金。
- 所長にならないと、家庭を持ってない。(でも、みんなが所長になれる訳ではない。)
- 増え続ける「仲間」たち。一方、団塊世代も60代になり徐々に働き手が不足。
- 旧態依然とした職場。**仲間たちにもう一つの「選択肢」を！**
- 未来において間違った選択ではなかったと思える方向へ歩め。
- しかし、全員は連れていけないもどかしさ。苦しさ。
- 自分の決断・行動が誰かの人生を変えてしまうことの重み。**他者に対する「責任」。**

## →2008年3月、特定非営利活動法人1to1設立

障害者自立支援法に基づく新しい事業所の開設を目指して準備を進めたが、諸事情により、4月の開所に認可が間に合わず・・・

急遽、当時の上司(作業所の所長)が自分で設立した株式会社による運営に切り替え、4月1日に**多機能型事業所「ワーカーズハウスぐらす」を開設【薬園台】**

雑草のように、逞しく。土の中深く(地域)に根を張って、その繋がりがあいの中で生きる。G\*R\*A\*S\*Sのように。



## 黄昏ゆく時代の中で③:

### In motion 2009 ～1to1始動！

- 1月より、新たな＜出会い＞を求め習志野へ。  
→仲間たちと共に”花咲く”拠点を！ →ぶろっさむ【実靱】
- 船橋では、中途障がいの人たちが”癒され・潤う”居場所を →あくあ【前原】
- **2009年6月1日、就労継続支援B型事業スタート！！**  
**実質的には、異なる2つの「作業所」の同時運営のようなもの。**
- 当時、新体系（障害者自立支援法）事業へ移行した事業所は地域では珍しく、各方面からの期待を背負っての船出。
- 作業所時代より報酬が上がり、職員も常勤として雇用できるようになったが、それでも当時の初任給は、15万8千円。  
**依然、課題がいっぱい。（でも、裏を返せば「伸びしろ」はまだまだある！）**

# 私たちの「こだわり」

- 根拠を持って、いのちの多様性を肯定する
- 障がいのある人たちと、まちなかで暮らす  
人や地域とのかかわり合いの中で、生きる(生かされる)
- 一人一人の役割を見出し、か(た)ちにする

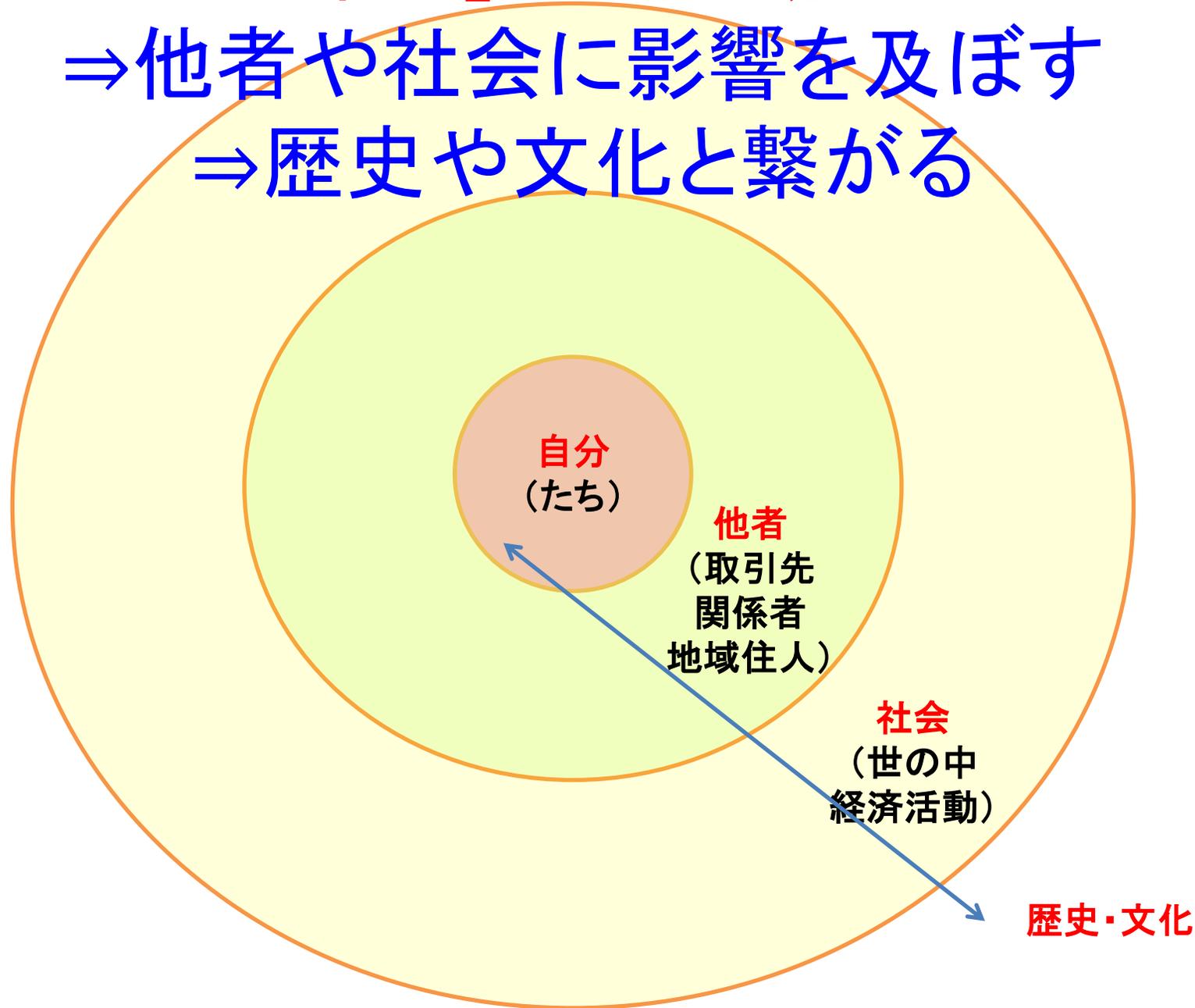
⇒「個」が「孤」にならずに

未来へ<希望>を繋ぐことができる社会を！

「働く」=人が動く

⇒他者や社会に影響を及ぼす

⇒歴史や文化と繋がる



## 黄昏ゆく時代の中で④:

# 2010年代、衰退が加速する日本社会

- スマートフォンやSNSの普及によるインターネットの「個人化」が加速。  
→「どんな情報に興味を持ち、アクセスするか？」で、人々が階層化。
  - AI技術の発達やDXによる産業変化で、経済格差の拡大と再生産も。
  - 人々の暮らしを支えていた**社会の包摂性(地縁・血縁関係や住人同士の見守り・助け合い)**が薄れ、**地域の中で問題を抱えた「家庭」が孤立**。  
→「子供の貧困」「8050」「老々介護」などが社会問題に。
  - 社会の分断による人々の<孤立化><不安>が増大。
  - 「人口減少社会」の衝撃(自治体の半数が2040年に消滅)
- 地域福祉を支える社会基盤(地盤)がそのものが沈没(=底抜け社会)**。  
生活困窮に陥ったり生活保護を受けて暮らす人たちが増えはじめる。  
※ 就労支援よりもまずに、生活の<土台>部分の支援・支えが必要に！

# 「震災」から学んだこと ～いま・ここ、ありふれた「日常」のかけがえのなさ



# 1 to 1 の歩み ～トライ＆エラーの軌跡



- 2008年 3月 船橋市にて、法人設立
- 2009年 6月 船橋にて、就労継続支援B型事業を開始。(定員20名)  
船橋のあくあ(10名)、習志野のぶろっさむ(10名)の合同体。
- 2011年 6月 船橋にて、B型事業所を増設。(わさび・定員13名)
- 2014年 4月 習志市の事業(ぶろっさむ)を船橋の事業から分離。単独のB型事業として指定登録を受ける。(定員20名)
- 2017年10月 船橋にて、第4事業所ブルーバード開所。(定員10名)
- 2017年11月 船橋にて、共同生活援助事業を開始。(Aries・定員6名)  
\* グループホームを1棟運営(ありえず)
- 2018年 4月 船橋のB型事業を「りすたあと」「あくあブルー」として再編。
- 2019年 4月 船橋にて、生活介護事業を開始。(ささえ・定員20名)
- 2020年 7月 法人事務所を習志野(実靱)へ移転。
- 2021年 1月 船橋のB型事業の運営を一般社団法人「るーむ」に移管。

表示回数 9,595 回

共有 編集します

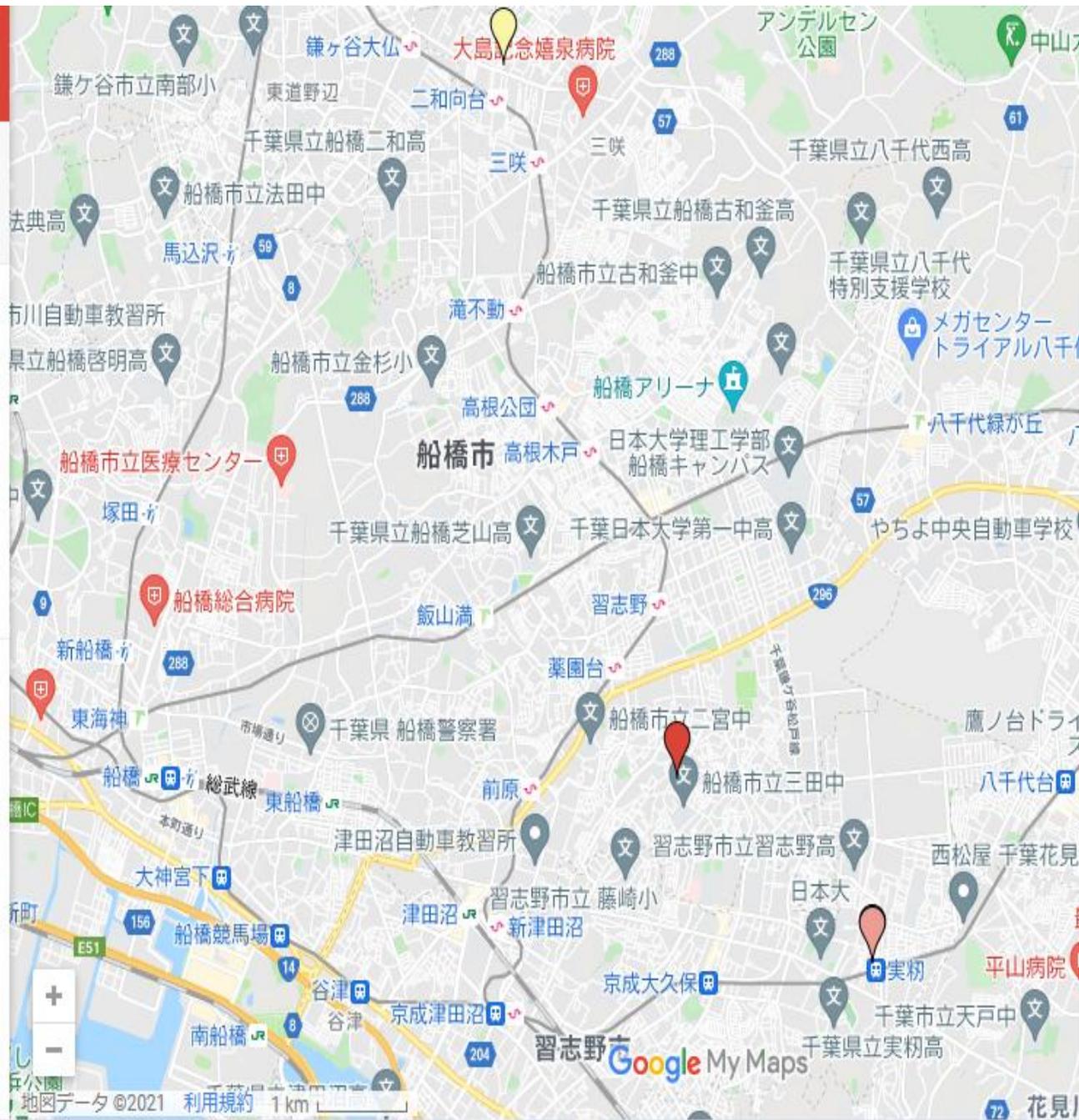
☑️ 1to1事業所マップ

📍 1to1船橋くらしサポートセンター ささえ

📍 Aries (ありえず)

📍 ぶろっさむ

📍 特定非営利活動法人1to1



Google マイマップで作成した要素

アカルイミライのために①:

# 「アフターコロナ」の世界

- **奇妙な時代に生きて～コロナがあぶり出した私たちの社会**  
経済成長で<都市化>した世界が、交易を通じて複雑に結びつき、相互・即時的影響を及ぼし合う。気候変動、環境破壊、エネルギー・食糧問題などが、身近な問題に。
- **人と自然、感染症(ウイルス・細菌)との怪しい共存関係**  
人類が自然環境に手を加え、新たな交通網(交易路)を作るとき、「感染症」もまた一つの文化・文明圏を超えた広がりを見せる。Covid-19の騒動はいずれ収束するだろうが、世界中で環境破壊や気象変動が続く限り、第2・第3のコロナが生まれるのではないか？
- **What a Wonderful World ! (この、素晴らしき世界 ! )**  
コロナ禍という非常事態に乗じて各国の統治権力は自国民の主権制限を試み、一定数の人間がそれを支持した。そして彼らは、国防と資源獲得を理由とするパワーゲームに乗り出す。誰が得をして、誰が損しているのか？そして、血と涙を流しているのは・・・？

# 暴力と憎しみの連鎖、のろまにしか歩まない世界...



## アカリイミライのために②:

# 日本社会はこれからどうなるのか？

### ＜あらためて気付く「失われた30年」の現実＞

- 夢(理念)を失った国で生きる哀しさ、しんどさ。
- 「生きかた」を背中で語ることのできない大人たち。
- 利権・損得まみれの政治が続き、様々な問題が未来へと先送り。
- 産業構造改革が遅れ、国際競争力が大きく低下。
- 緊縮財政により、教育や保健・福祉などの社会政策が縮小。

そこに訪れた「人口減少社会」という未経験領域。

→国発信の一億総活躍プラン&「『我が事・丸ごと』地域共生社会」(2017年)

※介護職員の必要に対する不足予測(2021年7月厚生労働省公表)

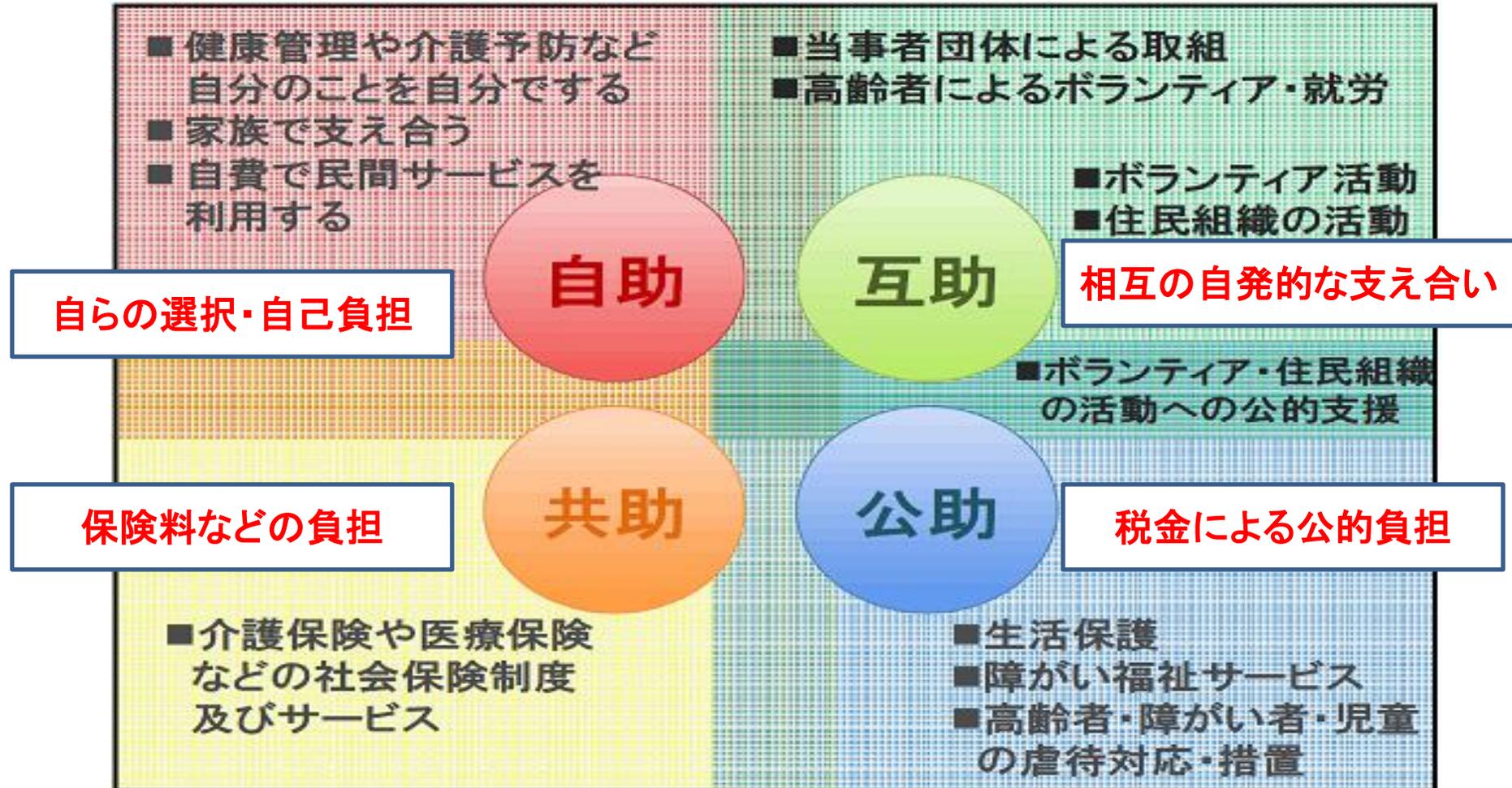
2025年度・・・約32万人、2040年度・・・約69万人

→ 日本(国)という大きな船は、おそらく“沈む”。そのとき、「我がまち(地域)」の課題を「自分ごと」として引き受ける人間の多い地域・自治体だけが、“生き残る”のだろう。

# 皆が共に支え合う暮らしのイメージ

家族・親族間の助け合い

住民自治やNPOなど非公的サービス



社会保障制度

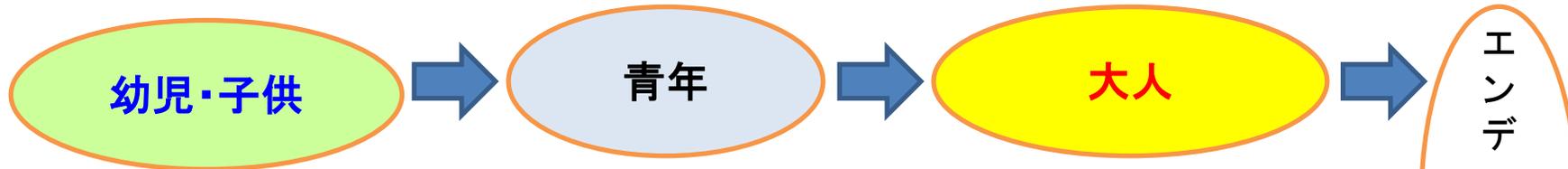
社会福祉制度

## アカルイミライのために③:

# 私たちの暮らしと地域や社会との関係は、どうあるべきか？

- 誰も「答え」など持っていない(「答え」を語る人間は、たいがいインチキ)。だから、一人一人が自分たちの地域や社会の課題を「自分ごと」として捉え、**<未来>にかかわる意思決定に積極的に関与することが必要**。
- 私たち自身が主権者としての自覚を持ち、**「社会参加」と「意思決定」**へと開かれること。そして、同胞たちを勇気づけ、**「社会参加」と「意思決定」**を支援すること。それが、**共同体の「自己決定」=自治**。
- 21世紀を乗り越える**新たな<価値>**の創造を！  
テクノロジーの発展は私たちの生活を便利で快適なものにしたが、それだけで人が**<幸せ>**になる訳ではない。延々と似たような風景が広がる社会ではつまらない。**その地域ならではの特徴や魅力を発見し・打ち出し<価値>として発信する**、そんな人や産業が育つまちづくりを進めたい。

# 「その人」のライフサイクルのイメージ (Boy's Life編)



・群れ(家族・・・肉親や兄弟・親族)の庇護下で生活＝「**支えられる側**」  
 ・自分の「**根っこ**」を育てる

・**トライ&エラー**  
 ・「**自分**」を知る  
 →新たな「**自分**」をつくる

・新しい群れ(仲間・家族)との出会い、暮らし  
 \*元の群れに戻ることも含む  
 ・社会を「**支える側**」になる！

・どこで、誰と、どんな「暮らし」をするかは、保護者等が決定  
 ・「実家」での暮らし  
 ・「施設」での暮らし

・「**生き方**」の可能性を模索  
 モラトリアム～自分探し  
 ・一人暮らし、二人暮らし  
 ・寮、シェアハウス、GH等  
 ・職場、居場所、余暇活動

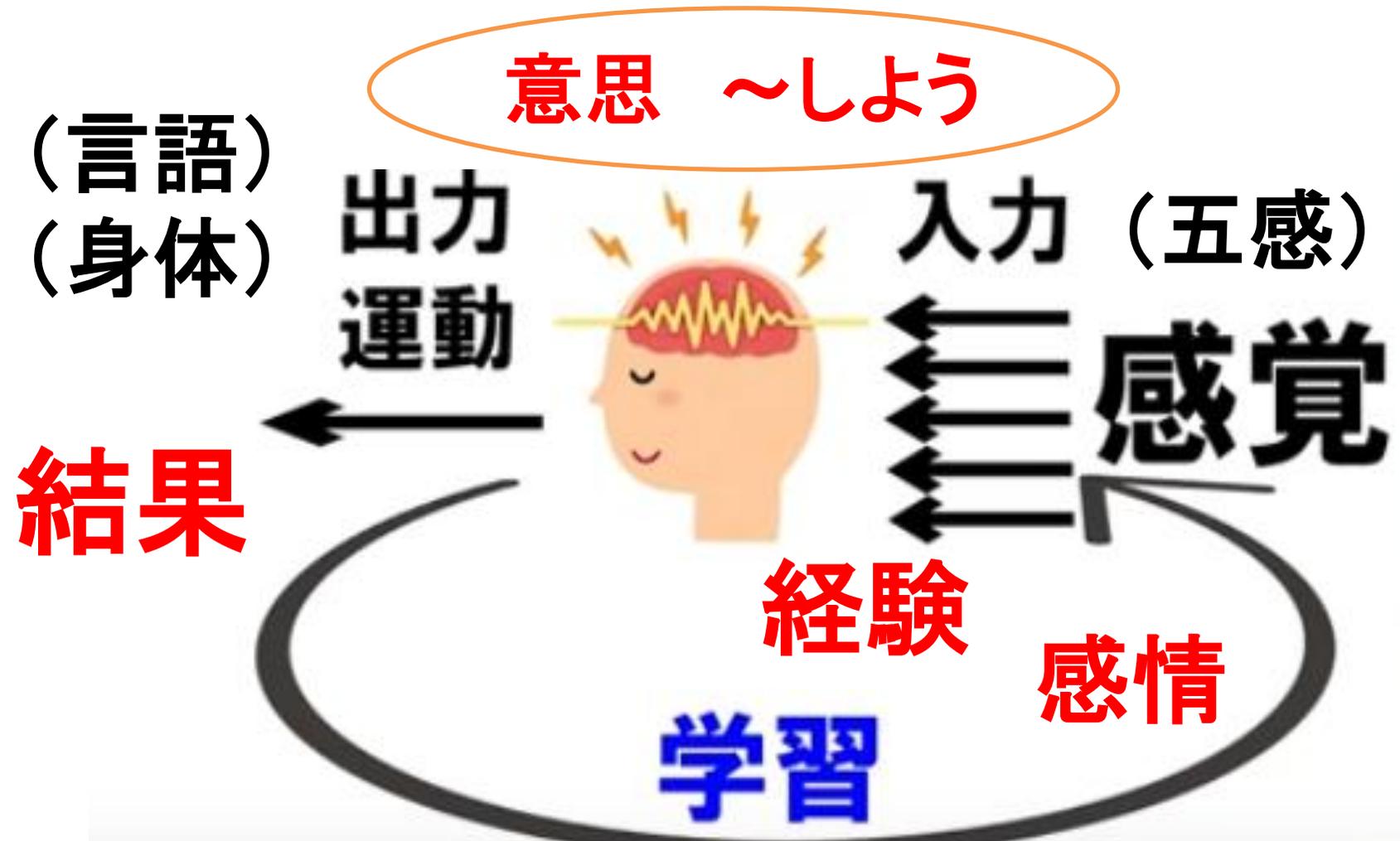
・どこで、誰と、どんな「暮らし」をするのかを**自分の意思で選ぶ(自己決定)**  
 →「**自分らしさ**」の実現  
 →「**ライフスタイル**」の確立

## アカルイミライのために④:

# ＜未来＞のために福祉ができること

- その人が**地域の中で生きていくための根っこ(価値観)**を育てる。
- 体・手足・指先、顔や口を意識して動かす、自然や人、社会とかかわる経験を提供し、**社会生活の＜土台＞となる力**を育む。
- 自ら考え、**自分の意思で選び・決める(自己決定)経験**と、フィードバックを通じた**学習(成長・成熟)機会**の提供。
- 日々を「**いきること**」「**はたらくこと**」の喜びを実感してもらう。
- それらを通じた「**人として幸せに生きる権利**」(**人権**)の追究。

「**学習**」とは、身体や言語を通じた  
**出力**と**結果入力**（フィードバック）



# アカルイミライのために⑤： 福祉から社会へ！

- <福祉>が地域や社会のアウトソーシング先になってはいけない。  
それでは地域や社会の外に<福祉>が押し出され、「**金銭でサービスを購入(消費)する**」だけの**貧しい関係性**しか生まない。
- むしろ、<福祉>を地域や社会の側へ**積極的に戻して、内在化させる**ことを目指していくべき。
- そのためには、私たちの日々の営みそれ自体が社会の「**ありがた**」のモデルとなれるよう意識しながら、<実践>を積み重ねることが必要。  
「**地域共生**」「**社会的包摂**」(social inclusion)は、おそらくその先にある。

**Look on the bright side !**

